



TITLE:

計画8-4 高崎山のニホンザルの食糧資源からみた森林構造とその分布 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

長岡, 寿和

CITATION:

長岡, 寿和. 計画8-4 高崎山のニホンザルの食糧資源からみた森林構造とその分布(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1997, 27: 90-90

ISSUE DATE:

1997-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164930>

RIGHT:

計画 8-3

高崎山のニホンザルの繁殖個体の採食戦略とその縦断的比較

横田直人（大分短期大学）

エサの採り込み方法は低順位のオトナ雄の場合、出産によって変化する個体がいることがこれまでの横断的調査から確かめられてきた。今年度から同一個体を連年追跡してみることにした。山の中の自然エサの採食時間は非出産年の同時期に比べて、約40%も増加させていた。高順位のオトナ雄でこの時間は逆に20%減少していた。これによって低順位のオトナ雄が得た自然エサからのエネルギー量(kcal)は約20%増加していると推定される。この値は、今後栄養分析が終わり次第はつきりさせたい。アカンボウを抱えた低順位のオトナ雄は山の中で、特定のオトナ雄と行動をとることが多く見られた。エサ場内でも同一雄との行動が目立った。低順位のオトナ雄の人工エサの採り込み量は、調査をすでに終えており、その出産年と非出産年で15%~20%の増減がみられた。これは高順位のオトナ雄で10~15%の増減であった。いずれも出産年が高い値を示していた。自然エサと人工エサを合わせた一日の採り込み量の違いは、出産年と非出産年では15~20%あると推測される。今回連年で観察した個体は、低順位、高順位それぞれ1個体と標本数が低いので、次年度はさらに観察個体数を増やしていきたいと考えている。オトナ雄との近接、追従の関係があまり深くないと思われる個体のエサの採り込み量の違いもみていく必要もあろう。また低順位個体には、アカンボウをもつと他の個体との関わりを薄くするものもあり、今後の検討課題である。

計画 8-4

高崎山のニホンザルの食糧資源からみた森林構造とその分布

長岡寿和（大分短期大学）

本研究はニホンザルが高密度で生育している自然林の環境収容力の評価を試算することを最終目標に進めている。高崎山では過密になったニホンザルの採食圧により、特定の樹木や森林に影響が及んでいる。枝枯れ、枯死、樹形の変形や萌芽・開葉の遅れなどフェノロジーにも異変が起きている。サルの遊動域の森林荒廃を示す具体的な例として林内に以下のような現象が見られた。

1) 採食のためエノキ・ムクノキなど、特定の樹種に立ち枯れが見られた。これは12月~2月にかけてサルの皮はぎによる採食が原因と思われる。A群・B群の遊動域にこれらの樹種は1本も見あたらない。A群域の観察木であった樹高約10mのムクノキも冬季の皮はぎ、4月の萌芽時の採食、再び萌芽した6月の採食が繰り返され1987年には樹冠全体に葉があったが、1992年の春には萌芽せず枯死した。2) 高木層の樹冠部は採食によって葉密度が低下している。3) 森林下層部でアオキが異常に繁茂している。4) 開葉・開花・結実の時期が遅くなっている。採食のためにB群の遊動域内のクスノキは萌芽・開葉は柵外のものより1カ月遅く、フェノロジーの観察を始めた1987年からは結実も見られなかった。5) 林床に後継樹が見られず、実生を含む30cm以下の木本性植物がほとんど見られない。6) 土壌表面は植物が生育できないほど堅かった。7) 落葉などの有機物量は餌場周辺の林床部では極めて少ない。